

準備委員会企画特別講演 2

国際貢献の現場で活躍できる人材とは

菅 波 茂

(AMDA (特定非営利活動法人アムダ) 代表)

司会 田中 共子 (岡山大学)

I. AMDA の国際的援助活動—教育心理学会との接点とは— (司会による紹介)

AMDA (特定非営利活動法人アムダ) は国連の「総合協議資格」を持つ、非政府組織 NGO・国際医療ボランティア組織である。世界29カ国に支部を持ち、3,000人以上のスタッフを抱える。アジアを中心に、戦争、災害、貧困等で恵まれない人々に、医療サービスや保健衛生教育、病院建設・運営、エイズ予防教育、医療従事者育成などの支援を実施している。緊急援助活動 (短期的活動)、地域医療活動 (長期的活動)、地域開発活動 (中長期的活動) を幅広く展開しているが、緊急援助活動が新聞等で報道されることも多い。1993年ソマリア内戦、1994年ルワンダ内戦、1995年阪神・淡路大震災、1999年台湾大地震、2001年アフガニスタン紛争、2004年スマトラ沖地震・津波など、アジアを中心に世界中の紛争地、災害発生地、難民キャンプに医師などを派遣してきた。AMDA の活動については、配付資料 (AMDA のパンフレット) に要約されているが、HP (<http://www.amda.or.jp/>) に詳しい。菅波茂氏は1984年より AMDA 代表を務め、ご自身も内科医として、国際的な人道支援活動の最前線に立ってこられた。

以下の3点において、AMDA の活動と教育心理学会員との接点があると思われる、本講演を企画した。①「地域」から「地域」への人道支援が広がってきたため、日常生活の延長上に国際支援が展開されるようになっていく。国際的な援助活動は、もはや一般市民と縁遠い話ではない。世界の現実を認識し、関わり方を考えていくことは教育的な課題といえる。②大学生の研修や高校生の協力活動、地域の大学との包括的な提携、医学生の国際的ネットワーク作りなど、AMDA は教育との接点を多く持つ。ボランティア学生による、印象的な体験談も多い。学校だけでは学べないものがある。そこで何が学べるのか、教育関係者として関心がある。③緊急援助活動には、心理学的な要素が豊富に見出せる。組織論、リーダーシップ論、危機管理、リスク評価、集団間関係、集団思考、パニック、ストレスなど。心理学が断片的に関

心を寄せ、実験を繰り返してきた現象が集積する場だ。

つまり AMDA の活動は、非日常を活動の舞台としながらも、日常への連続性を持ち、人間心理にとって興味深い現場であり、そこには教育的な示唆も豊富に含まれている。それゆえ AMDA の話は、心理学者を引きつけてやまない。

国際貢献できる人材は、どう育成するのかと問うと、菅波代表は「成長のためには実体験や疑似体験が有効であり、組織もスタッフも修羅場を抜けて学ぶ」と答えられた。そして「体験」の意義を強調された。学校教育ではなく、「現場」でしか教育できないものとは何なのだろうか。

II. 講演要旨 (講師)

1. メッセージある援助—日本の国際貢献の限界とは—

(災害現場や AMDA の活動の様子を組写真にしたスライドを背景に) このスライドは、自然災害の現場だ。こういうところに AMDA は出かけている。でも自然災害が起こったからといって、手ぶらで現場に行っても役には立たない。そこでは「緊急援助活動」が展開されている。それはどうすればできて、それをなし得る人材はどうすれば育成できるのか。そこには学校教育では想定されない「何か」がある。その話をしていきたい。

現代は、地球規模でグローバル化が進んでいるが、教育のあり方もそれに即して考えねばならない。この意味では、国際貢献や国際社会における、日本の振る舞い方を考えることも必要になってくる。ところで「プロフェッショナル」と「スペシャリスト」は違う。その違いは何だと思うか。それは倫理・道徳の有無にある。後者は「技術者」だが、前者は「専門家」である。限界を知っていることが、プロフェッショナルの条件だ、と言い換えてもよいだろう。国際社会における日本の立場を考えたときには、日本の限界についても考えていかざるを得ない。日本の国際援助活動には、ある種の「限界」があるように思われる。ちなみに AMDA はどうしているのかというと、我々は岡山県に本部を置くが、「多国

籍 NGO」としての組織を持っている。そういう立場で活動していくことで、この壁を突破したと思っている。では日本の「限界」とは何かについて、援助活動の現場の話を用いながら、お話してみよう。

「不条理! どうして私はこんな目に!？」というキャプションのついた、難民キャンプや被災地のスライド写真を背景に) このように災害や戦乱に見舞われた人たちは、「不条理だ! どうして私はこんな目に?」と考える。こんなとき、人はつながりを求めている。不条理な目に遭っている人を絶望から救うのは、「見放されていない」というメッセージである。医療救援活動においては、一粒の薬がそれを伝える役目を果たす。

だが薬さえ届ければいい、というわけにはいかない。実際は、国際貢献の現場では、「説明のない親切」は拒否されるという現実がある。援助に行っても、「どうして私はあなたを助けるのか」を、説明する必要があるのだ。つまり、ただ行くだけではだめだ。説明できなければ、「見返りを要求するのでは」と、疑われることすらある。

「国際貢献」と「国際協力」は違うものだ。前者は、顔の見える国際協力を意味する。日本の活動には、この点がどうも不足しがちのようだ。顔の見える国際協力が、あまりできていない。それがつまるところ、日本の「限界」となって現れている構図が見て取れる。

援助といっても、誰が、誰に、どういう理由でするのか。援助のときには、まず「相手がどういう人たちか」を考える必要がある。相手の属性は様々だが、宗教は相手について考えていく中での、きわめて大事な一項目である。日本では、援助における宗教色は抹殺されがちだが、しかし現実の国際社会は、宗教なしには理解できないのも確かだ。

例えば、「啓典の民」について考えてみよう。この一神教の人々とのつき合い方は、どうすればいいのか。彼らは世界の多数派であり、これまでずいぶんと世界を動かしてきた。旧約聖書、新約聖書、コーランなどは、重要な啓典として知られている。「啓典の民」の一つである、アフガンの「原理主義者」と、AMDA が接触し交流したときのことで、アフガンの難民キャンプでは、子どもの死因は、次の3つが多かった。汚染水による下痢・脱水、砂漠の気温変化から風邪になり肺炎になる、ワクチンで防げたはずの病気。AMDA は、未来を守るためにすべての子どものワクチン接種が終わるまで、停戦しませんか、という働きかけをした。その結果、タリバンと北部同盟は、岡山で停戦協定を締結するに至った。原理主義者といわれるタリバンは、啓典を守るとむしろつき合いやすい。家族の今日の生活(食・住)と、明日の

希望(教育)を届けたいという働きかけは、啓典の趣旨に照らして、効果的なメッセージだったのだ。「預言者のごとき振る舞い」には、説得力がある。つまり預言者の言葉を魂の救済にしている人たちには、彼らの宗教が大事にするキーワードで、メッセージを出して動くべきなのである。

キーワードを使つてのコミュニケーションは、大変効き目があった。このときの国際貢献には、「預言」というキーワードを含む、メッセージの発信が求められていたと考えられる。現実的にいうならもちろん預言のみではなくて、預言と金と行動力が大事ということではあるが。

さて、この視点から考えてみれば、1990年の湾岸戦争のときに日本が巨額のお金を出してなぜ、顔の见えない貢献と言われたのかがわかるだろう。啓典の民、預言者の宗教を持つ人々と、ディスコミュニケーションをしてしまったことから、日本の孤立が生じたのではないかと思われる。相手の習慣を知って動くことが必要なのだ。そうでない外国人の好意は、効果がないうえに、違和感を生み出すものにもなってしまう。

では、この啓典の民にとっては、「有言実行」「有言不実行」「不言実行」のどれが最も価値があるか。面白いことに、日本とは価値順位が違う。日本で好まれる「不言実行」は、最も価値が低い。こうした地域では「不言実行」はやめた方がいい。仮にこうした地域で、メッセージを明確に発さずに援助活動に入ったらどうなるか。メッセージなき行動は、不安感や警戒感を与えてしまう。それは援助のための行動というより、盲動とすらいえる行為になる。こういうところで活動するのなら、「メッセージなき援助」を、「メッセージある援助」に変えないといけない。

要するに相手とコミュニケーションできないと援助もできない、ということを経験に銘じる必要がある。この意味で、「善意だけでは動けない」のである。

2. 血縁共同体社会における援助—アジアの人とのつき合い方とは—

次に、世界の8割を占める、「血縁共同体社会」の人たちとのつき合いについて、考えてみよう。アジアやアフリカを中心に、こうした社会は多い。一般的な日本社会は、これとは逆の発想を持っているようだ。例えば日本には、「遠くの親戚より近くの他人」という言葉がある。こうした考え方は、血縁共同体社会のものではない。彼らは「近い他人より遠い親戚」である。例外は沖縄だ。沖縄は血縁共同体の社会ができあがっている。この意味で沖縄は日本のマイノリティだが、世界のマジョリティだといえる。

アジアは総じて、血縁共同体社会だ。(「義理人情、冠婚葬祭、相互扶助」というキーワードの入った、現場写真のスライドを背景に) 我々がアジアの人とつき合っていこうと思うなら、「義理人情」「冠婚葬祭」「相互扶助」というコンセプトを大事にせねばならない。義理人情というのは2つの種類の親切を意味する。知っている人同士の親切が「義理」、知らない人同士の親切が「人情」だ。冠婚葬祭、特に葬送は、血縁共同体の最も大事な要素だ。人が死んだときには、必ず駆けつける。そうしないと「義理」を欠いてしまう。「義理欠き」にならないよう、最大限の注意を払う。実際に、沖縄の新聞はかなりの紙面を、死亡記事や葬式の情報提供に割いている。沖縄社会で葬式がいかに大事かが分かるだろう。

ここにあげた3つのコンセプトを重視するのは、一般的な日本の習慣の外にある行動かもしれない。しかしアジアなどで援助活動を続けていくなら、このつき合い方をしっかり認識しておく必要がある。

3. ポジティブ&ネガティブリストー学校でなく現場で育まれるものとはー

援助活動をしていくときに、どういう能力が必要になるかを考えてみよう。援助活動は不確定要因に満ちたものも多いし、その状態が長期にわたることもある。そんな援助活動の場では、どういった行動の仕方がふさわしいのだろうか。

この問いに対しては、「ポジティブリスト」と「ネガティブリスト」という概念をあげて答えておこう。「ネガティブリスト」とは、「決まったこと(してはいけないこと)以外、何をしてもよい」という行動規範であり、行動パターンである。対して、「ポジティブリスト」とは、「決まったことしか、してはいけない」という行動の仕方である。ポジティブリストでは、「効率」を重んじる。ネガティブリストでは、「創意工夫」を重んじる。例えば踊りでいうなら、よさこい踊りは比較的自由に踊るので前者、阿波踊りは決まったパターンで踊るので後者の例だろう。反則以外なんでもできるプロレスと、一定の決まり手で決着を付ける相撲、あるいは軍隊と警察組織に、たとえてもよかろう。ポジティブリストは官僚の発想だ。決まったことを設定して、それをさせようとする。ネガティブリストは、ルール作りやシステム設計、コンセプトを出す。状況をよくしようとしたときも、前者は改善、後者は革命につながる。

日本の学校では、ネガティブリストの教育をしていない。むしろポジティブリスト、つまり目標や規範を設定して、それを教えてやらせようとする体制が、基本的に強いように思われる。日本の中では、NGOやNPOが、数少ないネガティブリストの体験の場となっているので

はないだろうか。

国際貢献の場では、ネガティブリストで動く人や団体が活躍する。不測の事態も多いし、決まったことだけしていればすむような場では、とうていいない。臨機応変に判断して実行していかないと、切り抜けられないことは多い。それでは、ある人がネガティブリストか、ポジティブリストかの見極めは、どうするのか。それは、「やらせてみること」である。それまでは分からない。

ではさらに、もしポジティブリストで動く人が、現場に出たらどうなるか。それが初体験で慣れていなくて、しかもかなりの混乱状況であった場合には、パニックに陥ってしまうことがある。ちなみに変なプライドや使命感のありすぎる人も、パニックになりやすい。例えば医者だから、ナースだから、医療活動はするがゴミ始末はしない、などの発想はその類である。さっさと何でもする姿勢の方がはるかに役に立つし、またそうでないとやっていけないのが現実だ。

4. 阪神・淡路大震災でのエピソードーボランティア元年の意味するものとはー

さて、公共性と公益性の違いは何だろうか。前者は、「ないと皆が困る」ものを指す。後者は、「あると皆が助かる」ものを指す。この意味では、「ボランティア」は、公益性のある活動といえるだろう。阪神・淡路大震災の起きた1995年は、ボランティア元年とされる。100万人ともいわれる「個人ボランティア」が、現場に駆けつけたからだ。かつてはネガティブリストで動く個人は、「売名行為」とそしられた。それはかつては、日本には「団体ボランティア」しかなかったからだ。団体なら、ポジティブリストが発動する。神戸では、活動の単位が団体から個人になったために、ポジティブリストのルールからの逸脱が結構見られた。

人道援助とは、「参加」であるといっても過言ではない。ポジティブリストの人は、何をするのか考えて、そうこうするうちに何日か経ってしまう。でもネガティブリストの人は、まず出かけていく。見放されているという恐怖、すなわち絶望が、不条理な状況にある人を襲っている。これは自殺者の心理に通じるものがある。だから、とにかく「早く」、現場に行くことが重要だ。何もいらないから、まずは参加する。見放していないという、メッセージを送る。そこを優先する必要がある。

震災の援助活動のときには、「トイレが汚い避難所は気を付ける」という経験則が、AMD Aスタッフの間に伝わっていた。それは、一番嫌な仕事をする人がいない証拠だからだ。そういう避難所では、人心が荒れている可能性がある。善意がうまく伝わらないかもしれない。

テレビで災害の現場を見てから、あれこれ手間をかけ

て現場にやって来る人がいた。地震の混乱があらかた静まっていたのち、遅れて来たボランティアが、災害現場を求めてパニックに、という例もあった。かといって完全に復活するまで滞在する、などというのも無茶な話であった。援助活動は引き上げ時を間違えてはいけない。

5. スマトラ沖地震でのエピソード—血縁共同体社会で求められるものとは—

スマトラ沖地震のときは、どうだっただろうか。このときの援助活動の話からは、いわば血縁共同体社会に降り注いだ惨状に、どうエントリーするかが浮かび上がってこよう。ローカルイニシアチブ、つまり「郷にいれば郷に従え」という考え方が重要であることを強調しておきたい。

アジアの社会では、電話一本で人が動くような関係、つまり借りであれ貸しであれ、契約書なしで動くような人間関係が存在する。例えば、「義理」で動いているときの中国人同士は、契約書など作らない。義理、すなわち知り合い同士の親切行為では、そのようなことは不要な関係と見なされているからだ。AMDAの活動も、こうした関係に組み込まれていくことを想定して、実績を積み上げていこうとしている。

逆に、何かあったのに動かない、行かないとなったときには、それを説明できるか、ということにもなる。行かないなら行かないで、それは何故なんだ、と問い詰められるだろう。葬式に行かないなどというのは、特にアジアでは非常にまずいことだ。災害という、いわば大きな葬式ならば、「AMDAは必ず行く」という姿勢を、常に明確しておかねばならない。

こういう社会において援助活動をしていくには、援助を出したり、出さなかったりという中途半端な行為はいけない。それは整合性を欠く行為だ。この社会では、被害の大きさ次第で、助けに行くかどうか決めるなどというのは、「説明できない」ことになる。一貫して、何ができるかなのである。何かあるから出すとか出さないとか言い出すと、それはもはや「打算」に映ることを、知っておかねばならないだろう。

血縁共同体社会の人とつき合うときは、どうするのがよいだろうか。その答えは、家族のように受け入れるのがよい、ということだろう。例えば、遠方から来てもらったときには、小ぎれいなホテルより、汚くても自分の家に泊めて差し上げる方がよい。実際にアジアの来訪者を自宅に泊めたときには、大変喜ばれた。その出来事を通じて、自分もこの考え方を実感したという経験がある。また日本の災害に対して、「友として」一ヵ月分の給料を寄付してくれたアジアの指導者の逸話もある。この着想も、まさに血縁共同体のものといえるように思う。

沖縄は、日本で唯一の血縁共同体社会だ。援助活動の参考には、沖縄をよく見て沖縄に習うのがよいと思う。この概念は、必ずや国際社会でつき合うときの鍵となる。

我々は血縁共同体社会、相互扶助の中で、「AMDAは必ず来る」、という伝説を作りたいと思っている。

6. 多国籍医師団の編成—援助を受ける側にもプライドがある—

AMDAは、多国籍医師団の編成をとっている。「誰にでも他人の役に立ちたい気持ちがある」「この気持ちの前には民族・宗教・文化等の壁はない」「支援を受ける側にもプライドがある」というのが、AMDA人道支援の3原則だ。人道支援は、欧米などの先進国のみの特許ではない。途上国の方でも、援助を受けるだけではなくて、自分たちにできることをしたいと考えている。途上国にも、国際貢献のチャンスがあつてしかるべきだ。実際には機会がないから、人道支援という領域での自己実現ができないでいる、という可能性を考えるべきだ。

貢献の機会は、誰にも公正に与えられているだろうか。「公正」と対比して、「差別」の定義とは何か。意欲も能力もあるが機会を与えられずに結果が出せない人がいる場合に、機会が与えられない理由が正当かどうか、差別かそうでないかの基準となろう。途上国には、経済条件や社会的なポジションの問題で、機会が少ないのかもしれない。途上国の医師も、医療の教育をうけているし、医の倫理を持っている。国際貢献にはお金がかかるので、そのお金がないから外国に行けないだけなのかもしれない。自分たちが貢献できる機会があればしたい、という思いは、確かに存在する。AMDAはアジアの多国籍医師団として活動してきたし、これからもこの形での活動を続けていきたいと思っている。

III. 質疑—いくつかの質問に答えて (部分要約)— (講師)

講演の御礼に対して：質問をしたり意見を述べたりするのは、講演の話し手を認めるという行為なので、講演の御礼を述べていただくのは、それだけで十分意味がある。関心がある、存在を認める、感謝している、ということが伝われば、それだけでもとても良いやりとりだ。「自分のお金を払っていない」人は、後ろの方に座って質問もしないものだ。これと関係する話を一つしておこう。信用できる人の条件とは何か、という話だ。それは、自分の金を使っているかどうか、自分の時間を使っているかどうか、本気で困ったときに、自分の人間関係を使って問題解決を図っているかどうかだ。現場で活動するには、相手が信用できるかどうかを見極めるのは、大変大事なことののだが、これらが充たされていれば、そ

の人は信用できると判断している。

人間関係について：人間関係には、フレンドシップ、スポンサーシップ（利だけ共有）、パートナーシップ（利害どちらも共有）がある。2番目の関係で援助されると、場合によっては、プライドの傷つく「ありがとう」をいう事態になる。でも3番目の関係なら、互いの良さが本当に分かるので、無理なく「ありがとう」が連発できる。道を教えてくれてありがとう、私に道を聞いてくれてありがとう、と言い合える関係だ。こういう関係を持ちたいものだ。

日本の良さについて：現在、日本の平均寿命は世界一だ。それは日本が世界で一番、楽園に近い国である証拠ともいえるだろう。世界を見れば、生き抜くことは大変なことだと分かる。それが長くできる日本は、この意味

で良い国だといえる。それが21世紀に日本が世界に誇るべきことだと思う。

危機管理について：君子危うきに近寄らずというが、それは逆で、危うきには近寄らないから君子でいられるのである。お金がないときに危ないところへ近づかない、お金がなければ身を守る言葉を持つなど、あらかじめ危ない羽目に陥らないよう、考えて行動すべきだ。

IV. まとめ（司会）

お話を聞くだけでも、世界が広がる気がする。講師の持ち味が遺憾なく発揮されて、コミュニケーションライブのような時間を共有できた。本日は、感動を抱いて帰路につけることに感謝したい。